

「選り分ける神」

マルコの福音書 1:38~39

はじめに

前回に引き続き、場所はガリラヤの湖畔の町カペナウムです。ここでイエシュアは会堂で教え、悪霊を追い出し、また多くの病人を癒されました。そして朝早くまだ暗いうちに寂しいところへ出て行き、そこでひとり祈られました。この祈ることをヘブル語でパーラル(פָּרַל)と言い、創世記 20:7 でアブラハムが、死を宣告されたゲラルの王アビメレクの家に戻りいのちを与えるために祈ったことにその本来の意味があると述べました。すなわちそれはアブラハムとその子孫、イスラエルを通して地上のすべての民族、部族、つまり私たち異邦人が祝福されるという創世記 12:3 に記された、神がアブラハムにお与えになった契約の成就、その完成を指し示すものであると述べました。これが祈るという行為が指し示す本来の意味、第一の目的であるならば、信仰の創始者であり、完成者と言われるイエシュア（ヘブル 12:2）の祈りがこれと無関係であるはずがありません。いやむしろこれこそがイエシュアの宣教の第一声「天の御国が近づいた」（マタイ 4:17）と言われている神の国、御国とも呼ばれるその内実であると考えられます。イスラエルによって祝福される世界、イスラエルを中心とする統一国家、その実現を願い、信じて待ち望む祈り、それがイエシュアの祈りが指し示す、その具体的な出来事であり、天地創造の前から神が御計画されたその完成であると考えられます。そしてその祈りの後にイエシュアが暗闇の中イエシュアの後を追って来た弟子たちに対して語られた言葉がこれです。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:38 イエスは彼らに言われた。「さあ、近くにある別の町や村へ行こう。わたしはここでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから。」

1. 福音を伝える

イエシュアはカペナウムを出て、「近くにある別の町や村へ行こう」と言われました。その目的は「ここでも福音を伝える」ためです。ここで「福音を伝える」という部分は、ヘブル語ではカーラー(קָרָא)「呼ぶ、告げる、読む」という意味の動詞が使われています。この言葉の最初の言及から、その本来の意味を考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】

創世記

1:4 神は光を良しと見られた。神は光と闇を分けられた。

1:5 神は光を昼と**名づけ**、闇を夜と**名づけられた**。夕があり、朝があった。第一日。

神の天地創造の御業の第一日、「(神は光を昼と) 名づけ…」と訳されているのが聖書で最初のカーラーです。「光と闇を分けられた」とあるように、カーラー「名づける」とはそれぞれを区別することを表

し、特にここでは「光を良しと見られ」神は光だけに目を留められ、これをお選びになり、闇から分けられ、区別されました。このように、「福音を伝える」と訳されたカーラーとは本来、神が目を留められるものと、そうでないものを分ける、区別するという、神の選びを意味する言葉であると考えられます。つまり福音を聞いてそれを信じる者は神が目を留められる、あるいは神がお選びになった者は福音を聞いてそれを信じる、そしてそうでない者すなわち福音を信じない者、神がお選びにならない者と分けられる、区別されるという意味です。今日も世界中でこの福音が宣べ伝えられていますが、そこには必ずそれを聞いて信じる者と、そうでない者すなわち信じない者が現れます。「福音を伝える」ことは神の区別、選びを意味しますから、どちらでもいい、あるいはそのどちらでもないというような者はありません。福音が宣べ伝えられる時、そこには信じるか、信じないかという二つの選択肢しか存在しないのです。

しかしそのような言い方をすると、ここに一つの疑問が生まれます。それは福音について、神について、何をどれだけ信じれば、実際に信じたことになるのかということです。御存知の通り、聖書に記された知識、情報量は膨大で奥が深く、私たちがまだ神について聞かされていないものも多くあります。しかもすでに私たちが聞かされている、知っていると思っていることでも、断片的であったり、偏りがあつたりします。また翻訳による誤解などもあります。そして何より私たちがこの福音を一体どの程度信じているのかというその度合いが問われるとしたらどうでしょうか。私たちはその心に一片の疑いもなく福音を、神を信じているのでしょうか。おそらく神の基準で見て、完全に信じ切ったと言える人物はイエシュア以外にはいないでしょう。ですから福音を聞いて信じる者は神に選ばれる、というような言い方には問題があります。

「福音を伝える」と訳されたヘブル語カーラーの最初の言及で、神が光を良しと見られ、闇と分けられたその理由は、神がただ一方的に光を呼び出され、その御心のままこれに目を留められ、良いもの、御自分のものとしてお選びになったからです。ですから信じた者が神に選ばれるのではなく、神がその御心、御計画のままにお選びになった者が、神を信じる者とされるという言い方がより適切であると言えます。

× 神を信じる者 → 神に選ばれる

○ 神に選ばれている者 → 神を信じる者となる

神がその御計画においてお選びになった者は、神はその者に目を留め続け、どんなことがあっても、たとえその者自身が拒んでも決して見捨てられません。これは神の御計画が、神以外の存在の意思や働きに依存するものではなく、何にも揺るがされることなく、一つも違わず必ずすべてが成し遂げられるというものだからです。その象徴とも言える事実がイスラエルであり、旧約聖書に記されたその歴史において、彼らは神から離れ、偶像礼拝を行い、ついに国土を滅ぼされ世界中に離散させられますが、神はそのイスラエルを回復させ、建て直し、新しく造り変え「神を信じる者とされる」という御計画をあらかじめ持つておられるので、今日、彼らの不信仰や罪が神の御計画の進行に一切影響を与えていないどころか、むしろ逆にまったくその御計画のままに進んでいることがわかります。このように神の御計

画の土台とも言うべきその選び、区別は決して変わることがなく、それを指し示しているのが「福音を伝える」と訳されたカーラーの持つ本来の意味であると考えられます。ですからヘブル語の視点で見れば、イエシュアは誰でもいいから適当に出会った人に、手当たり次第に福音を伝えて一人でも多く信じさせようとしておられるのではなく、神の御計画に従って歩み、神がお選びになった者を選び出し、そうでない者とははっきりと分ける、裁く御方であるということが示されていると考えられます。

2. 出て来た

そしてイエシュアは福音を伝えるために「出て来た」と言われました。ここにはアーヴァル(אָוַר)「渡る、進む、通り過ぎる、越える」という意味の動詞が使われています。

【新改訳 2017】

創世記

8:1 神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた。神は地の上に風を吹き渡らせた。すると水は引き始めた。

これはノアの箱舟の出来事です。神の怒りにより地球全体を覆うほどの大洪水が起こり、地上のすべての生き物が滅ぼされました。しかしそれは同時に神が「覚えておられた」すなわちお選びになったノアと箱舟に入ったすべてのものに新しい地をお与えになることでもありました。ここで「(風を)吹き渡らせた」と訳されているのが聖書で最初のアーヴァルです。これによって神の怒り、滅びは過ぎ去り、新しい地が現れることとなります。ですからアーヴァルとは本来、地上を滅ぼすこと、そして神がお選びになった者に新しい地をお与えになるという神の御計画を指し示す言葉であると考えられます。この解釈は先ほどの「福音を伝える」という意味のヘブル語カーラーの持つ本来の意味とも繋がります。どちらも神は御自分がお選びになったものに目を留め、そうでないものと分けられる、裁かれることが指し示されています。

このようにイエシュアという御方は、その名の由来であるヤーシャ(יֵשׁוּעַ)「救う、助ける」という意味の通り、神がお選びになった者には救いをお与えになる存在です。しかしノアの箱舟の出来事にも示されているように、そこには救われなければならない状況がもたらされる、滅びの時が来るということが同時に指し示されており、神がお選びになった者にとってイエシュアとは神の救い、永遠のいのちですが、そうでない者にとってそれは死の苦しみ、永遠の滅びをもたらす恐るべき存在となるのです。ですから「福音を伝える」カーラー、そして「出て来る」アーヴァルという言葉の持つその本来の意味が指し示す神の御計画は、選び分ける、裁くという面において、神がお選びになった者だけでなく、すべての人の上に成就する、表される、成し遂げられるものであることが指し示されていると考えられます。またそれは一部の限定された国と地域のみならず、全世界にカーラーすなわち宣べ伝えられるものであることが次に示されていると考えられます。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:39 こうしてイエスは、ガリラヤ全域にわたって、彼らの会堂で宣べ伝え、悪霊を追い出しておられた。

3. ガリラヤ

イエシュアは「ガリラヤ全域にわたって」行かれたことが記されています。ガリラヤ(גליל)、この名前については以前にもお伝えしましたが、もう一度述べておきたいと思います。この語源はガーラル(גלל)「転がす」という意味の動詞にあると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

29:1 ヤコブは旅を続けて、東の人々の国へ行った。

29:2 ふと彼が見ると、野に井戸があった。ちょうどその傍らに、三つの羊の群れが伏していた。その井戸から群れに水を飲ませることになっていたからである。その井戸の口の上にある石は大きかった。

29:3 群れがみなそこに集められたら、その石を井戸の口から転がして、羊に水を飲ませ、その石を再び井戸の口の元の場所に戻すことになっていた。

29:8 …群れがみな集められて、井戸の口から石を転がすまでは。それから、羊に水を飲ませるのです。」

29:9 ヤコブがまだ彼らと話しているとき、ラケルが父の羊の群れを連れてやって来た。彼女は羊を飼っていたのである。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブが、故郷であるカナンを離れ、ハランの地へ行った時の出来事ですが、彼はそこで大きな石のふたがついた井戸を見つけます。その傍らに三つの羊の群れが伏していて、さらにそこにもう一つ、ラケルの羊の群れが加わって、合計四つの羊の群れが集まった時に、大きな石のふたをガーラル「転がして」、羊の群れに水を飲ませ、その後に再び石をもとの位置に戻すことになっていたという記述です。これがガーラルの最初の言及なのですが、ここには非常に重要な神の御計画が表されていると考えられます。すなわち井戸のふたとなっていた大きな石とは、イエシュアを指し示していると考えられます。そして四つの羊の群れとは四方、東西南北すなわち全地、全世界の国々を指すと考えられます。イエシュアがガーラル、初めにおられた所から転がされる、下ろされる、つまり天から降りて来られることによって、すべての羊の群れに水をのませるように、福音が全世界に宣べ伝えられることが「型」として表されていると考えられます。そして石を再びもとの位置に戻すように、イエシュアが十字架の死からよみがえらされて、天の御父のみもとに昇って行かれるところまでが表されていると考えられます。

【創世記 29 章でヤコブが見た井戸に表された神の御計画】

- ・井戸の口にある大きな石を転がす → イエシュアが地上に降りて来られる
- ・四つの羊の群れに水を飲ませる → 全世界に福音を宣べ伝える
- ・石をもとの場所に戻す → 十字架の死からよみがえらされて天に上られるイエシュア

ですからこのガーラルを語源とするガリラヤという地名には、全世界に「福音を伝える」すなわちイエシュアによって救いとそして滅びに分ける、裁くという神の御計画が及ぼされるという意味が指し示されていると考えられます。つまり「ガリラヤ全域」と訳されてはいますが、ヘブル語の視点で見るとこれは全世界、全地、すべての国々のすべての人々を指していると考えられます。

4. 追い出す

そして「悪霊を追い出しておられた」とあるように、神の御計画は人や地上の生き物だけでなく、悪霊、悪魔、サタンと呼ばれる存在に対してのものでもあることが指し示されていると考えられます。つまり彼らは「追い出されます」。ここにガーラシュ(צָרַח)という動詞が使われていますが、これについても以前述べましたがもう一度お伝えします。この最初の言及は創世記 3:24 です。

【新改訳 2017】

創世記

3:24 こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

これは罪を犯したアダムとエバが「エデンの園」を「追放」された時の場面です。このようにガーラシュとは本来、エデンの園から追い出され、「いのちの木への道」すなわち永遠のいのちへの道が閉ざされて滅びることを指し示していると考えられます。かつてのエデンの園には悪魔も入ることができたようですが、新しいエデンの園である「神の国、天の御国」には彼らは決して入ることが許されず、そればかりかついに滅ぼされてしまうのです。

【新改訳 2017】

ヨハネの黙示録

20:10 彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

20:11 また私は、大きな白い御座と、そこに着いておられる方を見た。地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。

20:12 また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。

20:13 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。

20:14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。

20:15 いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

5. 恐れなさい

このように滅びとは、具体的には神の裁きによって、悪魔もろともゲヘナとも言われる「火の池」に投げ込まれることを指します。それが実際にどのようなものなのか、行った者にしかわからないと思いますが、知りたくもありません。そしてそこに入った者は二度と出ることができず永遠に、「昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける」のです。これが、神の御計画の完成を表すもう一つの側面です。ですから神がお選びになった者はすべて「神の国」へ、そしてそうでない者はすべて「火の池」へ。神の御計画の完成には、まったく異なるこの二つの結末が存在し、そのすべてが神の御心、その選びにかかっているのです。ですから私たちは神を恐れなければならないのです。

【新改訳 2017】

ルカの福音書

12:4 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。

12:5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

「(神を) 恐れる」、これをヘブル語でヤーラー(אָרַא)と言います。最初の言及を見てみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

3:10 彼は言った。「私は、あなたの足音を園の中で聞いたので、自分が裸であることを恐れて、身を隠しています。」

これは罪を犯したアダムが語った言葉です。彼は神の「足音を…聞いたので」、ヤーラー「恐れた」とあります。「神の足音」とは神の声とも訳せる言葉で、神の口から出る御言葉を指し示すと考えられます。それを「聞く」ことが「恐れる」ことに結びついています。ですから「神を恐れる」とは、「神の御言葉を聞く」ことにあると言えます。どうか私たちひとり一人が、これからもますます神の御言葉を聞くことができますように。そして神の御心にある選びによって、「神の国」へと確かに導かれて行きますように。